

会報

第 70 号 (2025/2/10)

〒720-0082

広島県福山市木之庄町 4-3-14

Tel&Fax 084-917-5837

Mail

h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp

Community Renaissance
Research Center

新しい希望の年、
明けましておめでとぅございます

代表理事 安川 悦子

今から100年ほど前の1923年、日本では関東大震災が起き、経済的には不況、中国では排日運動が激化し、1931年には満州事変を手始めにして、太平洋戦争がはじまりました。

若い男性は招集されて、中国やアジアで戦死し、日本中が空襲と食糧難の二重苦の生活に突入していきました。

私は東海道沿いにある母の実家である「本宿」といづくに疎開していました。小学校3年生であった私は、この田舎の小学校に転校し、毎日校長先生が半身裸になって、もちろん児童も裸になって運動場に集められ、校長先生の気合いのもとに、敵国アメリカをやっつけるための氣勢を上げていました。

列をなして山道を通って帰宅する途中、アメリカの飛行機が名古屋や岡崎の町を爆撃するために

飛んでいくのに出会い、あぜ道に伏せをしてやり過ごす毎日でした。今考えれば、田んぼのあぜ道に子どもたちが集団で「撃ってください」とばかりに伏せをしていたのです。

戦争に召集された私の父と二人のおじ。父はマレー半島に駐在し、一人のおじは海軍にいて船に乗っていたのですが、この船はどこかで沈没し、行方も亡くなった日も分からないまま死亡通知が来ました。祖母が嘆いていたのを覚えていますが、もう一人のおじはシベリアに抑留されていました。父は戦争に負けて、マレー半島でイギリス軍の捕虜になり、小さな島に閉じ込められて自活生活を送っていたそうです。それでも父は、イギリス軍から配給されたビスケットを大事に持って帰ってくれました。父の出征中に生まれた妹は、「これは食べられるの?」と聞いたと言います。ビスケット一つも食べさせられなかった戦時中の日本の食糧事情を母が嘆いていたのを覚えています。

10歳の子ども心に染みついた戦争の恐怖は、未だに忘れません。戦争だけはもうごめんです。戦争のない世界を強く希求して。2025年も良い年でありますように。



今後の予定

連続講座 オカリナが吹けるよ!

2月12日(水)・25日(火)

講師: 村山ひろみさん

(福山市立大学名誉教授)

場所: ルネッサンス研究所 集会室

参加費: 500円

5月に開催予定の「こいまつり」にむけて発表する曲などを練習しています♪

シロントロジー研究会

2月21日(金) 10時~

場所: ルネッサンス研究所

参加費: 300円

内容: 『ミニミューティヘルスのある社会へ』生活機能分類と高齢者の生活についての話で盛り上がりました

お味噌の販売

NPOで去年作った手作り味噌を販売しています興味がある方はご連絡ください♪

700g 800円です。



「ケアの社会学」を読む会

3月6日(木) 16時半〜

場 所: ルネッサンス研究所

参加費: 300円

読む本: 上野千鶴子著『ケアの社会学』

内 容: 「グリーンコープの福祉ワーカ―ズコレクティブ」(p.286〜)

今号の内容

- ・お正月の小物づくり
 - ・映画『ジョン・Q』が説明するアメリカの医療保険問題
 - ・「患者学のすすめ」新版」から見えてくる高齢期の暮らし方
 - ・わが家の耐震診断
 - ・私の元気な秘けつ
 - ・お便り紹介
 - ・ごあいさつ
- * 内容は以下に記載

活動報告

お正月の小物づくり



12月9日に地域の絆すまいる仁伍にてお正月の小物づくりイベントを行いました。施設の利用者さんが

お正月に飾る「しめ飾り」を手作りするイベントです。職員さんも当日飛び入り参加してください、7名で和気あいあいと作成しました。講師は毎年お世話になっている桑田喜代美さんです。

材料の色を自由に選べたので「しめ縄は何色にする?」と楽しみながらハンドメイドしていただきましたようです。飾りの配置も一人ひとり異なり、自由にボンドで貼ったり飾りを挿したりしながら1時間足らずで個性あふれる正月飾りが完成しました。お互いの作品を褒めあう温かい雰囲気にも包まれた時間でした。ご自分で作ったしめ飾りで、きつと良いお正月をお迎えいただけたことと思います。

お忙しいなか素敵なオリジナル作品を考案し、作り方を指導くださった桑田さん、本当にありがとうございました。



これが作品です!



制作している様子

映画「ジョン・Q」が説明するアメリカの医療保険問題 牧田幸文

昨年11月のアメリカ大統領選挙では、ドナルド・トランプ氏が再選を果たし、2度目の大統領任期に入りました。「再びアメリカを偉大にする(MAGA)」というスローガンを掲げて、これからの4年間を進めるようです。しかし、先日の就任式の報道を見ると、アマゾン、メタ、オラクル、テスラといったアメリカの主要グローバル企業の経営者たちがトランプ氏を取り囲み、アメリカに有利な経済活動を円滑に進めるために彼を支持している様子が映し出されていました。この光景を目にすると、大統領選でトランプ氏を熱烈に支持したラストベルト(アメリカ中西部の工業地帯)の労働組合や労働者たちは、再び置き去りにされるのではないかという懸念が生じます。

こうした世界的規模の企業がアメリカの経済と政治に影響を与える状況の中、年末にはニューヨークで衝撃的な事件が発生しました。アメリカの大手医療保険会社のCEOが銃撃されるという事件で、犯人は普段から保険会社が保険料の支払いを拒否していることに強く批判的だったと言われています。

アメリカには日本のような国民皆保険制度が存在せず、公的保険は高齢者(メディケア)や低所得者(メディカル)に限定されています。そのため、多くの国民が民間の医療保険に加入し、

平均約月10万円の保険料を支払っています(さらに介護については保険料として年間約60万円が追加で必要です)。それにもかかわらず、アメリカの民間医療保険会社の多くが保険対象の約3分の1に対して支払いを拒否しているとの指摘があります。このような状況下で、高額な保険料を支払っても十分に希望の医療を受けられないことに対する国民の不満が高まっています。その結果、今回の事件の犯人に対して「英雄視」する動きが一部で見られるほどです。

この医療保険に関する事件を聞いて思い出したのが、23年前に公開された映画「ジョン・Q」です。この作品は医療保険をめぐる問題をテーマにしたサスペンスドラマで、多くの人に深い印象を与えました。

主人公のジョンは、普通の工場労働者でしたが、景気悪化により時短労働に切り替えられます。そんな中、息子が重い心臓病を患い、入院先の医師から「心臓移植をしなければ命を落とす可能性が高い」と告げられます。ジョンは息子のために心臓移植手術を希望しますが、病院側から「加入している医療保険では移植手術の費用がカバーされない」と説明され、移植を諦めるよう勧められます。

ジョンが時短労働者となったことで保険内容が変更されており、手術費用を保険で賄うことができないプランになっていました。心臓移植には順番待ちが必要で、リストに載るためには保証金として5万ドル(約800万円)、さらに手術費用として150万ドル(約2億円)を現金で支払うことが求められました。この費用を支払えない場合、リストから外され、他の病院に移される可能性もあるのです。

そもそも、臓器移植手術は非常に高額であり、保険が適用されない患者は移植リストに載せられないのが一般的とされています。こうした問題に直面したジョンは、息子の命を救うために病院で患者や医療スタッフを人質に取り、心臓移植手術を要求するという極端な行動に出ます。この選択は明らかに間違った方法ですが、高額な医療費や不公平な医療制度に不満を抱える人々の共感を呼びました。事件の報道を聞きつけて病院前に集まったマスコミや一般市民、さらには人質となった人々の中にもジョンに同情し、彼の息子の移植手術を応援する姿が描かれます。この映画「ジョン・Q」は、医療保険から排除された人々の切実な思いと現行の医療保険制度の問題を強く浮き彫りにした作品です。

先述した医療保険会社のCEO銃撃事件は、アメリカの医療制度が依然として深刻な課題を抱えていることを明らかにしました。20年以上経過してもなお、医療に関する連邦政府の役割が小さく抑えられ、富裕層と貧困層の間で命に直結するほどの格差を生む医療保険制度が続いているのです。さらに、これからのランプ政権下では、すでに保証されているメディケアやメディケイドの連邦財源削減が予測されており、無保険者の増加により医療格差の拡大が懸念されています。



映画「ジョン・Q」最後の決断をニック・カサヴェテス監督、デズレル・ウィントン主演、ジェネオン エンタテインメント

BBC News Japan 「米保険会社CEO 射殺事件、犯行をたてえる声を当局が警戒、被告は無罪を主張」

https://www.bbc.com/japanese/articles/cnv3gz6_96

2024年1月20日検索

『患者学のすすめ(新版)』から見えてくる高齢期の暮らし方 加納三千子

1. この本の概略

この本は「リハビリテーション医学」の提唱者である上田哲医師(1932-)と社会学者で内発的發展論の提唱者である鶴見和子上智大学名誉教授(1918-2006)のお二人が、2001年に京都府うづうの里でおこなわれた二日間にわたる対談をまとめたものです。対話の形で行われたのは、鶴見さんの希望によるものですが、難しい話も少し形を変えては何度か出てきたので理解しやすいと思います。

内発的發展論^{注1}は、国家・地域の発展の話であり、リハビリテーションは障害を持つ個人の立ち直りの支援をする、とまるで異なるテーマを扱う専門です。私自身「内発的發展論」という言葉を目にしたのは初めてでしたが、この本を読んでみて、この言葉がこの本のキーワードになっている意味が分かったような気がしました。

また、私は2001年にWHO総会で議決された「ICF（生活機能分類）」^{注2}に関心を持っていましたが、今ひとつわかりにくいところがありました。しかしこの本には鶴見さんが脳出血による左半身まひになっておこなったことや上田先生のリハビリテーション^{注3}に関する具体的な言葉ができました。それにより、「生活機能分類」はたとえ病気等による障害があっても、それぞれの人が自分の人生をどう生きるか、を目的とした分類であることが理解出来ました。

また、かなり難しい言葉も出てきますが、脚注の形で説明がついており、理解しやすい編集になっていると思いました。

2. 専門の違う二人の対話がなぜ？

一つは、二人の問題意識の出発点に共通性があつたからです。

鶴見さんは「内発的開発論」の提唱者ですが、そのきっかけはアメリカで行われていた後発国・先進国の分類について疑問を感じたことだそうです。先進国も後発国もそれぞれ内発的なものは持っていると思つた。ただ、「後発国はお手本があるからそれを参照するが、内発性に基づかないと本当の発展はないだろう」と思われ夏目漱石の言葉を思い浮かべられたとか。したがって「近代アメリカを中心とした近代化論だけではなく、日本も中国もそれぞれの国の状況を踏まえて近代化を論じなければならない」と思われたそうです。

上田さんは、アメリカ流のリハビリテーションを広げようと留学から意気込んで帰ってきたといいますが、しかし表面的にはよく似ているが奥深いところで違いのある日本のリハビリの現状を見てカルチャーショック

を受けたそうです。自前で日本に合うような形のリハビリテーションを作ろうと「リハビリテーション医学」を立ち上げ、さらに「科学としてのリハビリテーション医学」の序文には夏目漱石の文章が引用されています^{注4}。そして新しい「目標試行的リハビリテーション」に到達されました。

このようにお二人とも、自分の新しい方向性を生み出す考え方に共通性がありました。

二つ目にはリハビリテーションでのつながりがあつたことです。脳卒中になった鶴見さんの最初の主治医は、「手足のまひを治すことが先決で、これが治らない限り歩いたり出来ない」と考えてひたすら訓練をおこなうリハビリを受け（鶴見さんは「軍隊式」と呼んでいる）、最後には「あなたは歩くことが出来ない」と言われたそうです。

ところが上田さんの共同研究者である大川弥生さんがリハビリの主治医になると、「あなたが歩けないのは足が内側に反っているからと言われ、下肢装具をつけウォーカー・ケインという器具を使うとちゃんと歩くことが出来たといえます。その時の気持ちを、鶴見さんは「ここで全く新しい人生が開けた。」といわれています。そして「歩くことにより私は人間として生きる自覚を持ち、新しい宇宙が開けていくような効用を日々感じる事ができるようになった」とも。歩くことにとどまらず著述もつづけながら、片手でリンゴがむける、野菜を洗って冷蔵庫に出し入れし、大根おろしやスープなどの料理、大好きな着物を一人で着る事もでき、脳出血で左半身まひになつてからの約10年間に30点の著書を出版されたと

も言います。こうした体力は、廃用症候群にならないように、と言われておこなっている器具を付け、施設職員さんの見守りを受けながら一日に200mくらいをあるいていることにあると、上田さんも解説しています。

3 おわりに

く見えてきた100歳時代の高齢者の生き方

書名は「患者学」のタイトルであつたが、そのことは上田さんの終わりの言葉のなかでまとめられています。が、「患者」のあり方やICFとはなにか、などの大切なことは、鶴見さんのリハビリにより生活状況が変化したことが如実に説明していると思ひました。

すなわち障害を持った当事者は自分の生活・人生を誰よりもよく知っている専門家と言える。したがって当事者がICFをよく知り、活用することでより積極的にサービスの質の向上に関与できる。専門家は本人や家族の言うことを傾聴し、当事者の人生（活動・参加）を正しく知る努力をしなければならない。

この本を読みながら、私は二つのことを考える事が出来ました。一つはこの本に出てくる文言の中から、これまで訪ねたいろいろな施設のとり組みのアレコレを思い描き、その意味を改めて考えることが出来ました。もう一つは20年あまり前に自宅で夫を看取つて以来「人間らしい最期」を迎えるとはどういうことか、そして夫を「人間らしい最期」にふさわしい送り方をしたのか、と言ふ疑問を持っています。この本を読むことでCIF（生活機能分類）や上田さんの考え方を理解することができ、そのことに

より20年持ち続けていた疑問に答えを出せたように思います。77歳で脳出血になり左半身マヒの生活を送った鶴見さんの言葉のように「老いや病・障害を受け入れ、人生の最後にこんな楽しい時間があつたことは幸せ」であつたと思えることではないかと思えます。私たちがそれぞれ『人間らしい最期』を迎えるためには、そのようなことが実現できるような地域作りが必要だとおもいます。そのためには病氣や加齢により障害を持っても、医師・看護師・介護士などの専門家とネットワークをつくり、それまでの生き方や専門家の知識を活かして協働により高齢者の生活が持続できるような地域をつくること、それが百歳時代を生きる高齢者の生き方で、これからの課題ではないかと思いました。

注1: 内発的發展論

イギリスやアメリカと同様に近代化することを良しとするのではなく、それぞれの地域でそれぞれの自然生態系とそれぞれの文化にしたがって、住民の創意工夫によって発展の道筋を提唱した鶴見和子の社会理論。『患者学』より)

注2: ICF(国際生活機能分類)

1980年にWHOでもうけられたICD-E(国際障害分類)を改訂したものの、ICD-Eでは病氣等の結果として起きる障害を、個人のマイナースとして捉えていた。2001年にWHO総会で決議されたWHO生活機能分類は①障がいのマイナース面だけではなく生活機能というプラス面を重視する、②活動に「実行状況」している活動)だけでなく「能力」(出来る活動)の二面があるとする、③環境因子と個人因子の影響を重視する、等の考え方の画期的転換を含んでいる。『患者学』より)

注3: リハビリテーションと患者学

中世、リハビリテーションは王侯貴族の復位や名誉回復の意味に使われていた。例としては「ジャンヌ・ダルクのリハビリテーション」が有名。医学の世界でこの言葉が最初に使われたのは第一次世界大戦終結が近い1917年に、「身体再建およびリハビリテーション部門」がアメリカ軍に設けられたときでした。「身体再建」とは日本でおこなわれてきた「機能回復訓練」にあたり、リハビリテーション部門は「職場に復帰させるようにする」目的で設置されたものでした。

第二次世界大戦後、リハビリテーション医学が独立したときにADL(日常生活活動)の概念を導入したことで、生命の価値が支配的であつた医学の世界に初めて生活の価値が導入された。また、1980年代にリハビリ患者の呼び方が「リハビリティー(権利を回復してもらう人)」から「リハビリタント(権利を自ら回復する人)」に変化した。つまり障害当事者はリハビリテーション(全人的復権)の、専門家・家族・一般社会の支援を受けつつ、自己の「復権」を実現する存在となつたのである。したがってリハビリテーションは患者本人の努力が不可欠。よって、この本に『患者学』の書名がついている理由もわかる。『患者学』より加納が抜粋)

注4: 夏目漱石の言葉

1911年に和歌山で演説したものを『現代日本の開化』にまとめたものから、次の文章を引用。
「西洋の開化は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である……開化の推移はどうしても内発的でなければ嘘だ……一言にして言えば現代日本の開化は皮相上滑りの開化である……事実やむを得ない、涙をのんで上滑りに滑っていかねければならない。」「『科学としてのリハビリテーション医学』より)

わが家の耐震診断「10のポイント」

- 新築は昭和56年(1981年)以降。
- 今まで大きな災害に見舞われたことはない。
- 増築していない。または建築確認などの手続きをして増築した。
- 傷んだ箇所はない。または痛んだところはその都度補修している。
- ※傷んだ箇所とは主に外壁や基礎のヒビ割れを指します。
- 建物の形はほぼ長方形、複雑な形ではない。
- 1辺が4m以上の大きな吹抜けはない。
- 2階外壁の直下に1階の内壁または外壁がある。または平屋建てである。
- 1階外壁の東西南北どの面にも壁がある。
- 屋根材は比較的軽いものである。または瓦など比較的重い屋根でも1階に壁が多い。
- 鉄筋コンクリートの布基礎・ベタ基礎・杭基礎など基礎が強固である。

※財団法人日本建築防災協会「誰でもできるわが家の耐震診断」より

☆ 右記の表は耐震診断の評価委員の先生から紹介されたものです。ご自分の家の診断をしてみてください。チェックが3つ以下だと問題があるそうです。早めに専門家に見てもらいましょ。

私の元気な秘けつ

藤原スエ子



健康のためにと、友人二人で始めたラジオ体操。雨風に関係なく、お正月も毎日続けた。会館の軒下の自転車置き場で。

休みたい、眠たいときもあったが続けられたのは、私がラジオを持っていたから。休むこともできず少し不眠。誰かに代わってほしいと言った。次第に人数が増加したが代わりの人は決まらず。自転車置き場の天井に吊しておいて早く来た人がボタンを押すだけにした。皆さんが気持ちよく協力的で我ながら名案だ！

人数が多いと騒音で迷惑をかけているのでは？と気になった。畑の人「朝食時間がわかりやすい」近くの家の人「夫婦で自宅の庭で行っています」と。まずまず安心した。

2024年2月より高血圧で寒い早朝の行動にはドクターストップがかかり、午後暖かくなつてからのウォーキングに変えた。一人で歩いていると出会った人とのおしゃべりあり、野菜も頂くし、一石二鳥だ。しかしビニール袋の中身が見えて「多すぎて太りますよ」「重いでしょ」というアドバイスで、家に帰ったらたった一個になっていたことも。少し納得できないので現在は中身の見えないうツップサックに水と折りたたみ傘を入れて、スティック2本で6000歩。背中が曲がっているのが伸びるし、楽しいウォーキングです。

地域の絆の新設施設を見学して

遠藤・加納

1月31日、山手町に「地域の絆」の新しい施設が竣工したと御案内をいただき、見学してきました。1階は小規模多機能施設の「地域センター泉」、2階は放課後等デイサービス施設の「エヌオー（ヘロー）泉」になっていました。1階は「地域福祉センター仁伍」の施設長さんが、2階は「エヌオー（ヘロー）仲良」の責任者の方がそれぞれ説明してくださいました。

通常、高齢者施設の床はバリアフリーになっていますが、ここには床より一段高くなった、足もととは温風のでる掘りこたつ状の場所がありました。「えっ！」と思うようです。が、高くなったところへは車イスの人でも（介助は必要でしょうが）腰をかければ良いし、畳を敷いた床面は座ったままでも移動でき、掘りこたつに足を入れることができるようになっていきます。「国際生活機能分類」の考え方がケアの分野にも適用される時代になってきました。

2階のフロアーに置かれたり吊り下げられたりした遊具は、自分の子育て時代とは様変わりしていることにもビックリし時代の変化を感じました。また、子どもたちが1階の高齢者と一緒に野菜作りが出来るように、土地が用意されていました。畑を用意しないと土にふれる事も出来ないのかなあとも思いました。

説明いただく途中で、施設利用高齢者についてのおもしろいお話をいろいろ伺いました。これらについては又の機会に。



退職の「挨拶」

兼村あゆみ

突然のご報告ですが、3月末をもってNPOを退職することとなりました。

事務局として8年間お世話になりました。その間、様々なことを勉強させてもらえました。食生活や腸内細菌についての知識、高齢者や障がい者が幸せに生きるためのヒント、地域の人との繋がりやコミュニティの大切さ、レジリエンスという言葉の持つ意味、労働と対価とやり甲斐そして社会との接点など。

これまでどこか他人事のように考えていた事を自分事として捉えられるようになったのは大きな変化であり収穫でした。

そして何より、この職場での一番の財産は多くの方々との出会いです。心から尊敬できる人々との出会いが沢山ありました。現役時代に指導者として、または役職ある立場として活躍してこられた方々、その道のプロフェッショナルとして今も活躍中の方、ITに精通しておられる方、何時間でも話せるほど魅力的な方、真摯に仕事に向き合う方々、時間をやりくりし貴重な休日にイベントを手伝いに来てくださる方々。事務局のメンバーにも大変恵まれました。頭の回転が早いユーモアたっぷりさん、コミュニケーション力高すぎ軽快フットワークさん、どこまでも寄り添える強さを持つ温厚さん、心から信頼できる人格者さん。皆大好きです。最高の職場でした。

4月からは初めての業種でフルタイムで勤務する予定です。

皆さま、これまで本当にありがとうございました。どうぞお元気で！

お知らせ

整理が出来たNPO所有の書籍のリストをホームページに掲載しました。活用ください。



アドレスです。

<http://www.fan.hi-ho.ne.jp/ryu5/crc-fukuyama/>

編集後記



リハビリなどが必要になった時に出逢える先生によってもこれからの人生がぐっと変わることがある。「ここで全く新しい人生が開けた。」という鶴見さんの言葉からそう思いました。鶴見さんはウェルビーイングな状態を保つことができる素敵な出会いがあったんだなあと感じしました。加納先生も先生の旦那様も。どんな状態になっても諦めないで前向きに生きていけばいいことがありますね。

ニュース 69号でお知らせしていました。樋口恵子賞の結果ですが、107冊 4件の受賞を逃しました。報告まで！

菊

NPOへのお便り紹介！



お便りを紹介します♪

映画「ファーマー」まだ見ていませんが、将来の自分の姿認知症を考える上で、ぜひ見なくてはと思いました。「ゆうしゃいん庄原」の地域ケアネットワークづくり。大変ですね。鞆のさくらホームは、こちらでもTVでみたことがあります。(Mさんより)

映画「ファーマー」を以前観て、わたしもホプキンスの娘の気持ちに共感しました。アンソニーホプキンスが実年齢の役に挑んでいる姿にしみじみしました。(Sさんより)



コムルネへのお便りを募集します。ご感想・ご意見などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。

問い合わせ・申込先

NPO法人コミュニティルネッサンス研究所

電話・FAX: 084-917-5937

メール: h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp

MEMO